



城

第三十六回 水城

はくすきのえ
～白村江での大敗と緊迫した国際関係～

深草 祐一

水城という史跡をご存じでしょうか。九州の太宰府を外敵から防衛するために造られた、長さ1.2kmに及ぶ土塁の遺構です。外敵に備えた防壁といえば、元寇防壁が思い浮かびますが、水城が造られたのはそれよりずっと前。大化の改新で知られる中大兄皇子の時代のことです。この時代に一体何があったのか。今回は、古代における大陸との緊迫した国際関係についてご紹介したいと思います。

水城の遺構

「日本書紀」卷第二十七天智三年の条に、西暦664年の記録として、「この歳、対馬嶋、壹岐嶋、筑紫国に防と烽をおく。筑紫に大堤を築きて水を貯へしむ。名づけて水城と曰ふ。」「秋、八月に、達率答春初を遣はして、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣はして、大野と椽、二城を築かしむ。」という記述があります。史跡「水城跡」は、ここに記された「水城」のことであるとされています。この記述から、水城とは水を貯めるダムのようなもので、敵が攻め寄せた際に、堰を切って敵を押し流すためのものだったのではないかと言われていました。そうであれば攻撃を意図した防御施設であって、かなり興味深いのですが、発掘調査の結果を踏まえ、現在では水濠を備えた強固な防壁であったというのが定説となっているようです。

博多から太宰府へ向かって行くと、横一直線にこんもりと木が生い茂った丘があります。これが水城跡であり、現在の福岡県大野城市と太宰府市の市境にもなっています。JR鹿児島本線、西鉄大牟田線、国道3号線、九州縦貫自動車道の全てが水城跡の土塁を削って通されていることから分かるように、両側の山裾の間が最も狭くなった箇所に築かれ、太宰府への入口を塞いでいました。太宰府は、筑前博多から筑後へ向かうためには地形的にここを通らざるを得ないという場所にあります。まさに北部九州を押さ



博多湾側から見た水城跡(手前の農地がかつての濠)

える要地であるとともに、周囲を山に囲まれ守りやすい地形にもなっているといえます。水城は、日本書紀でいう大野と椽の二城、すなわち水城の東端が接続する山の上に築かれた大野城と、南方で筑後平野への出口を守る基肄城と共に、太宰府を守る構造の正面を形成し、堰を備えた門を通らなければ太宰府へは入れないようにされていました。

発掘調査によれば、土塁の基底部の幅は約80m、高さ約10m、その両側には、幅約60m(博多湾側)及び約40m(太宰府側)の堀が平行に設けられ、土塁を貫通するように埋め込まれた木樋により、太宰府側から博多湾側へと水を流し込むことで、柵田状に区切られた濠に深さ約4mの水が貯まるようにされていました。当時の弓矢が殺傷能力を発揮する距離はおおよそ40mといえますから、弓の援護の下に攻め寄せる敵兵を防ぎ止めるには効果的な構造であったと思われます。

水城が造られた当時の東アジア情勢

さて、ここで水城のような防衛施設が造られることになった背景をみていくことにします。この頃、中国では隋が倒され唐が起こって間もない時代。朝鮮半島では、北の高句麗、東の新羅、西の百済の三国が互いに覇を競ってお

り、そして倭と呼ばれていた日本もこの朝鮮半島三国志に大いに関わっていました。朝鮮半島から多数の渡来人が日本にやってきて技術や文化を伝えたことはよく知られていますが、日本書紀に任那日本府という記述がみられるように、当時の朝鮮半島南部にも多数の日本人が居住していたようです。さらに、半島南西部からは日本独自の形態である前方後円墳が多数発見されるなど、古くから想像以上に密な双方向の交流関係があったことが分かっています（従来、韓国の考古学者から否定的な見解が出されていましたが、現代の民族意識で古代を語るべきではないという意見も増えているようです）。そして、朝鮮半島の各国は、当時まだ完全に統一国家とは言い難かった倭の諸勢力と結び、あるいは対立しており、半島での戦闘に倭からの援軍が参加していた様子も窺えるなど、軍事的にも少なからぬ関与をしていました。やがて、倭のヤマト朝廷は百済との結び付きを強め、新羅とは対立していくようになります。一方、新羅で即位した武烈王は親唐政策を採り、高句麗を圧迫していた唐の後ろ盾を得て、高句麗及び百済への攻勢を強めることになりました。

百済の滅亡と白村江の戦い

660年、新羅武烈王の救援要請に応える形で、唐の高宗は総勢13万の遠征軍を百済へと派遣しました。唐軍は高句麗が立ちだかる陸路ではなく山東半島から黄海を押し渡り、百済領へ上陸。新羅軍と呼応して百済の王都へと進軍したとみられます。迎え撃つ百済の対応は後手に回り、唐・新羅連合軍の包囲網の前に、百済王は降伏。唐へ送られ、百済王朝は滅亡したのです。しかしながら、その遺臣たちが要害に籠もり、唐の占領軍に対して抵抗を開始します。当時、百済王子の一人の豊璋が倭に人質として送られていたことから、百済復興勢力は、倭に向けて、豊璋を帰国させて百済王としたいと乞う書を送ります。当時のヤマト朝廷は、大化の改新の後、中大兄皇子（後に即位して天智天皇）を中心とした、親百済かつ反唐・反新羅の体制下にありました。中大兄皇子は豊璋を帰国させるとともに、



約100年ぶりに再調査されたJR線脇の土塁の断面

百済復興勢力への援軍を編成します。援軍の派遣は二度にわたり、二度目には総勢2万7千もの軍勢が大船団により朝鮮半島へ渡りました。しかし、663年8月、百済の地に到着した倭の水軍は白村江において唐の水軍と遭遇。4度の戦闘の結果、倭軍は大敗を喫してしまいます。倭の水軍は数では優っていたものの、投石機等の最新鋭兵器を備えた大型船を擁する唐の水軍の前に壊滅。唐の書物には、煙は天を覆い水は血で赤く染まったと記述されています。そして、倭の援軍も失った百済復興勢力は、9月、ついに降伏開城し、百済は実質的にも滅亡することになったのです。

大防衛体制の構築

さて、送った援軍が壊滅し、同盟国の百済が滅亡したとなれば、倭は、対立していた新羅と、旧百済領に占領軍を駐屯させている唐の圧力を直接受けることになってしまいます。唐が百済復興勢力の鎮圧のためにあらためて投入した軍勢は総勢40万といわれており、圧倒的な大軍勢がいつ倭へ攻めてくるか分からないという、非常に緊迫した状況に置かれたのです。この大陸からの脅威に対し、倭国内では急ぎ戦時体制がとられました。日本書紀によれば、白村江での敗戦から半年～1年程度のうちに、対馬、壱岐、筑紫、長門と、大陸からの侵攻ルートに備えるように戦略防衛拠点を幾つも築いており、そのうちのひとつが水城であったのです。非常に短期間に、これだけの防衛施設を複数箇所でも構築していることからみて、当時の国際的緊張関係の程が窺えます。

その後の水城

しかし、太宰府に唐が攻めて来ることはありませんでした。親唐派の新羅武烈王が崩じた後に即位した文武王は唐に対して微妙な態度をとり続け、668年の高句麗攻撃にも参加せず、王都平壤陥落後は高句麗の遺臣を呼び寄せて領地を与えたり、隙をみて旧百済領を併呑するなど、半島から唐を排除する方向で動いていきました。またこの頃、唐の使節が倭に来た記録がありますが、攻撃又は威圧目的というよりも百済からの亡命者を多数送り届けたとみられ、軍事的に衝突するような事態にはならなかったようです。

それから、時代が下るにつれ、交通の邪魔になる水城の櫓門は解体され、濠は埋められ、江戸時代には、既に門の礎石が謎の石として名所案内図に描かれるだけになっていたのです。しかし、百済人技術者の指導の下、強固に構築された土塁は今に残り、川や鉄道、高速道路等によって一部は分断されているものの、多くの部分が史跡公園として保存されています。かつて濠だった所は農地や自動車学校になっていますが、土塁から一段低くなった地形が当時の威容を想像させてくれます。